2023年10月8日 久宝教会 礼拝メッセージ

「置かれた所で咲きなさい？」　　牛田匡牧師

聖書　ルカによる福音書 17章 1－10節

「置かれた所で咲きなさい」という言葉をどこかでお聞きになったことはありますでしょうか。この言葉は渡辺和子さん（1927－2016）というカトリックのシスターが好んでよく紹介され、彼女の著書のタイトルにもなっています。「自分はここにいてもいいんだろうか。どこか違う所に、自分にとって、もっと良い場所、相応しい場所があるのではないだろうか」と思い悩んでいる時に、「今、あなたが置かれている場所で、もう少しだけ、今日一日だけでもやってみよう。そうすればきっと花はいつか咲くはず」、また「あなたがその場に置かれたのは、枯れてしまうためではなく、花を開かせるため。神様はあなたの人生に最善のものを用意して下さっているはずだから、あなたはここで花を咲かせることが出来るはず」……。そのように励まされて、その場に踏みとどまり、そして無事に花を咲かせることが出来たという人は少なくないと思いますし、この言葉から勇気をもらったという人も大勢おられるのだろうと思います。

その一方で、自分で今置かれている場所から、移動する術を持たない人たち、移動する手段も機会も奪われてしまっている人たち、それこそ種が発芽し、開花するのに必要な光も何もないようなどん底に置かれた人たちにとっては、この言葉は何を意味しているでしょうか。それは励ましとなるどころか、むしろ「いつまでもその場に留まっていなさい」という呪いの言葉としても響きかねません。同じ言葉でも、その言葉を受け取る人の置かれている場所、環境によっては、その意味する内容は全く異なって響いて来ます。

先週、大手タレント事務所であったジャニーズ事務所の 2 回目の記者会見が開かれ、社名変更がなされること、今後は被害者への救済、補償に努めることなどが発表されました。しかし、故ジャニー喜多川氏の行って来た未成年の子どもたちへの性犯罪、性暴力、性的搾取の実態はすさまじく、被害を受けた方々から直接申し出があっただけで、現時点で 500 人近い方々が被害を受けたと訴えられています。性犯罪被害者の方々は、受けたその傷の深さや、差別や偏見にさらされるという 2 次被害を恐れて、他の犯罪被害者の方々よりも、名乗り出ない方が多くおられます。そのことを考えると、実際には500人では収まりきらず、その数倍の人数があるだろうと考えられますし、彼が 40 年 50 年以上もの長期間にわた

って継続的に重ねていた犯行ですから、被害者の中にももう既にお亡くなりになっている方も何人もおられることと思われます。なぜこのような犯行が平然と行われ続けて来たのか。それは圧倒的な権力関係の下で、「ジャニー氏の言うことに従わなければ、デビューすることも出来なければ、仕事を続けることも出来ない」「隣の人が搾取され、暴力を振るわれているのを知っていても、見て見ぬふりをしないと、自分もその場に居られなくなる」というハラスメントに満ち満ちた環境が形成されていたからだろうと考えられます。そしてまたそのことを知りながらも、視聴率が確実に取れる人気タレントを起用できなくなることを恐れて、事務所に忖度し、それら一連のことを報道して来なかったマスメディアの責任も大きいと言えます。

今は、先日の記者会見が「やらせ」だった、ということが発覚して、「誠意に欠けている」「本当に反省していない」ということが報じられています。口では「被害者に寄り添う」と言いながらも、その姿勢が見られないことに憤りを覚え、また呆れますが、一歩退いて、眺めて見れば、これはジャニー氏とその事務所だけの問題ではなく、現代の日本社会全体を覆っている問題に他ならないと感じます。もちろんジャニー氏の行った犯罪行為は決して容認することの出来るものではありません。しかし、多かれ少なかれ、「花が開くためには、多少の犠牲は必要だ。途中で脱落した人たちには、花開くだけの適性が無かった。最後まで忍耐して努力した人だけが報われる」というような考えを認め、そのような考え方を「良し」としてしまうようなハラスメントの関係性の中に、私たちは生きていて、そしてまたそのような関係性を再生産してしまっているのではないかと思わされています。

今後、ジャニーズ事務所は廃業するということが明らかにされましたが、それでは被害者の方々の救済、補償の問題はどうなるのでしょうか。ハラスメントに関する研究をしている安冨歩さんによると、「この問題は水俣病などの公害問題と似た構造をしている」とのことでした。様々な公害問題において、「被害者救済」とは具体的には誰が被害者であるかを線引きして、「被害者」と認定された人たちに数百万円のお金を渡すことだったそうです。ですから、当然そこには「被害者と認定されない人」たちも大勢出て来てしまいます。水俣病特有の手足のしびれなどの症状があるにもかかわらず、住んでいた地域や年代の違いによって水俣病と認定されず、救済策の対象になっていなかった 128 人が、国と県、原因企業に賠償を求めた裁判で、先月、大阪地方裁判所は原告全員を水俣病と認定し、国などに賠償を命じる判決を下しました。それは画期的な判決でしたが、それでも 1

人あたり 275 万円の賠償金です。それでこれまでの失われた人生、傷つけられ狂わされた人生が返ってくるわけではありません。法的には過去の判例から相応しい金額の賠償金を支払うことで補償したことにはなりますが、それが果たして被害を受けた一人一人の救済とイコールなのでしょうか。今回のジャニーズ問題においても、「お金での解決なんて容認できない」と言って賠償金を求めない人も何人もいるだろうと思われます。安冨さんは「被害者の救済と補償は違う。救済に必要なのはお金ではなく癒しだ」と言われていました。傷つけられた霊の「癒し」には、お金よりも何よりも加害者側の真摯な謝罪、誠意が不可欠でしょうし、またその周りを囲む大多数の人々の「搾取は仕方のないことではなく、決してあってはいけないこと」というハラスメントを許さない覚悟が必要なのではないかと思います。

テレビやスクリーンの中で、また舞台の上で、キラキラと輝くように見えるアイドル、タレントたちの奥には、そんなハラスメントと暴力に満ちた泥沼や暗闇があったということを思うと、単純には楽しめない複雑な気がします。またそれらの泥沼や暗闇を大衆の目から隠そうと努めて来たマスメディアと、それに踊らされていた大多数の消費者たち、そして何よりそれによって搾取されていったタレント本人たちというその構造悪は大変根深いものであると思わされます。また「アイドル」という言葉が、聖書の中で何度も警告を発せられている「偶像」という意味であるということについても、改めて考えさせられます。「人間を偶像にしてしまってはいけない、又させてしまってもいけない」。なぜなら、そこではその人の人格、人権、人間性が失われてしまうからです。

今回の聖書のお話は、イエス様が弟子たちに語った短い言葉をいくつかまとめられたものでした。初めの 1－2 節は、「小さくされている者の一人をつまずかせることのないように気を付けなさい」「他人をつまずかせてしまう人は不幸だ」という弟子たちへの注意喚起の言葉です。そして 3－4 節は「7 回赦しなさい」という言葉です。これは「マタイによる福音書」で言われている「7の 70 倍まで赦しなさい」（18：22）に比べると易しいかと思ってしまいます。しかし、先日の「やらせ謝罪会見」ではありませんが、口先だけで「悔い改めます」と言うだけなのであれば、何度言った所で赦してはならないことではないかと思います。ここで「悔い改め」と訳されている言葉「メタノイア」は、本来「視座を移す・転換する」という意味のギリシャ語です。上に立って見下していた所から降りて、下に立って上を見上げるよう

な所に立つように視座を移すことであり、加害者側から降りて被害者側の隣に立つように転換することです。そのように本当に低みから見直すように変わった時には、たとえ 7 回であっても赦しなさい、ということをイエス様は弟子たちに言われました。続く「からし種一粒ほどの信仰があれば」（6）というイエス様の言葉は、「私たちの信仰を増して下さい」（5）と言って来た弟子たちに対して、「そもそもあなたたちは『今あるものを更に増やして下さい』と言う前に、からし種の一粒ほどにも持っていないじゃないか。思い上がっちゃいけませんよ」という忠告の言葉でした。さらに最後の 7 節から 10 節までの「主人と僕のたとえ話」も、10 節にある通り「なすべきことをしたにすぎません」ということで、「自分は何か特別なことをしていると思い上がることがないように、神様の前、隣人の前では謙虚でありなさい」というような言葉でした。これら一連のイエス様の言葉から言えることは、私たちはどこに立って見直すかが、常に問われている、ということなのではないでしょうか。

何重にも何重にも、巧妙に築き上げられている搾取の構造の中で、私たちは一消費者として意図せず生活しているだけで、誰かの足を踏み付け、差別し、搾取することに加担してしまうことがあります。それは世界の南北経済問題でもあり、また同時に身近な日常生活上の問題でもあります。そして、それは食料品や工業製品のみならず、テレビやマスメディアの中のショービジネスにおいてもそうです。今回の聖書の言葉「ルカによる福音書」17 章の 1 節は「つまずきは避けられない」は、直訳すると「つまずきを起こさないようにするのは難しい」です。他人をつまずかせたい、傷つけたいとは思っていない。けれども、つまずきを起こさないように、生じさせないようにし続けるのは、大変難しい、というわけです。願わくは、私たちが知らずに犯す罪がありませんように、隠れた罪から解放されますように（詩編 19：13）と祈ります。単に今、自分が「置かれている所」で花を咲かせることだけに注目している時、私たちは気付かぬまま他人を傷つけ、他ならない自分自身の霊をも傷つけてしまいかねません。そうではなく、少しでも小さくされている人々の側に自分が置かれている場を移して、そちら側からこの世界全体を見直して歩めるようでありたいと思います。そのような時にこそ、「自分が花を咲かすことの出来る場所はどこか」ということが、分かってくるのではないでしょうか。

「置かれた所で咲きなさい」。もう既に一人一人の霊の中に種は蒔かれています。そして神様はその一つ一つに、花を準備されています。そのことに信頼して、私たちは今週もそれぞれの場にあって、用いられて行きます。